

## 大震雜感

長岡半太郎

上

九月一日の大震災は多くの人の最初の経験である。其又終りの経験であらんことは誰も望むところであろう。其経験の談話は、新聞紙其他に載せられて、読者が既に飽きたる同一事項を記するに過ぎない。今復其にも関らず、自分の経験を書くのは無駄な頁を埋むるに過ぎない。只予は帝都より隔り、稍震源地に近き土地に居たから幾分か重複に亘らざるところがあるうと思う。

予は夏休中相州三浦郡北下浦に避暑して居た。八月末から九月初めには颱風の襲来する期節であるから、一昨年頃より考案して、昨年漸く物になった気圧微動計を用いて、人家少き処に於て気圧の微動を測り度い希望で、下浦の庭前に小さな石室を作り、其内にて観測することとした。助手内山清君も月末より下浦に来て、器械の据付其他を手伝つて呉れた。然るに東京の実験所にては旨く働いた器械が、どうも具合が悪く、四日計り何の結果も得られなかつた。九月一日早朝驟雨屢来り、庭前の松籟は慥に變動多き気圧あることを示した。今晚こそは立派にレコードを得度き望を以て、朝飯後直に調整に取掛つた。生憎暗室はなし、昼間電燈は来らず、気圧計を座敷の机上に安置し、其鏡に日光を受けて、反射光線を戸に張りたる尺度に映し、十一時過ぎ漸く調整を終つた。其後気圧の変化を窺えば、可なり急激である。朝からの驟雨は既に霽れて、庭の芝生は乾かんとして居た。斯くして一時間も経た

ぬうち、内山は日光を受くる鏡を少しく直さんと庭に出で、予は気圧計の側に坐つていた。そうすると僅かばかり体を持ち上げるような感じがあつた。逃げ出しては笑の種になるかも知れぬが、安全を守るに如くはなしと、庭の砂の上に跣足の儘に飛び下りた。内山は驚いて、先生何ですかと問う。地震のようだと言いながら、庭を四五歩する内に内山も、地震なることを感じて、予の傍に来たが、間も無く大なる水平運動が始まつた。其緩慢なる状況は船に乗つて揺らるる心地がした。しかし立つて居られぬ程では無かつた。振動が始まると共に、低調の響がドウドウと聞えた。家屋の方を顧みれば、盛に揺れて居る。三四回目の横揺れに縁側の柱が礎から離れ始めた。五六回目には屋根がよじれて、遂に家の此方は十度計り傾いた。折しも昼飯の調理をしていた下婢は、台所から庭の方に大変な地震だと騙け出して来た。大声で火は消したかと尋ねると、再び入りて水を懸けて出て来る。振動は漸次微弱になつたが容易に鎮りそうもない。然し四隣は寂として声無く、海も亦静であつた。庭前に設けた小さな石室は房州石を土堤の傍に積み重ねて造つたもので、石と石との間にセメントは入っているが、地震に対しては最初に崩れることと予め考えていた。然るに些少の亀裂も入つて居ない。土堤を越えて漁夫の魚見の番屋がある。覗いて見れば何たる変化もない。不審にも母屋が傾いた。建てられてから殆ど九十年を経過した茅屋であるから、最早老朽して斯くなりたるか、さりとて理由を他に見出し得ぬが、近所のものに此傾いた状況を見らるるも強腹だと、独り思案に呉れているところに、隣の漁夫が狼狽して庭に来て、俺の家は壊れてしまった。何某の家では足を挟まれて大騒ぎだと、蒼白な顔色をして話す。して見ると老朽計りの為めで無かつた、門を出れば近隣殆ど全き家なく、不思議にも無事であるは、なまこ板葺きの納屋か、薄く藁で葺いた貧乏家屋で、瓦葺きは大概大破か崩壊かしている。そこで始めて予の茅屋の傾いたのも解つた。昨年萱の葺き足しをして、厚さ二尺八寸になつたので、頭でっかちである。其れ故ベンジング・モーメントが大きくなつた。其れが傾斜した原因である。倒壊しなかつたのは幸であつた。将来地震に対して屋根の目方を軽くせねばならぬことを覚つた。そうこうする内浜辺を見れば、従来干潮の折

にも決して見ない広さになっている。浪打際なみうちぎわまで普通より二十間位拵なまった。是は只事でないぞ、津浪の襲来する前兆であろう。浪が来れば剣ヶ崎を越えて来るから、愈いよいよ来る迄には時間がある。見て居れば分る。恐らく二三十分内には来るだろうと思つて、舟を曳き上げさせ、庭後の篠藪の小高き所に陣取つて待つていた。其時考うるに、三陸の津浪は七十尺が最高であつた。其れは太平洋に面した側であつて、金田灘の如き人海では其半分と見ても三十五尺、逆とても庭迄来ることは無かるうが、用心に如しくは無しと、藪の中から海を見守つて居るけれども、風波不穩で何たる変りが見えぬ。斯かくして半時間と過ぎたらんに、余震は度々来るも段々輕微となり、待ちたる敵は来ないから、芝生に膳を並べて昼飯を喰う間に、机上に残した気圧計を見れば、依然として倒れもせず、方位を曲げもせず安置されてある。振動が緩慢な故でもあるうが、地震は左程迄強くはなかつたのだらうと独り極めして、又よく家の傾きたる模様を見れば、北面の方が甚しく、大黒柱の附近は前に変りはない。家は田舎の茅屋であるから、一尺角の櫓の大黒柱が屋根の一方を支えている。是が軸となつて廻転した形跡が歴然として明になつた。そこで大黒柱は風の爲め、亦地震の爲めに効用の大なることを覺つた。

食事中頻しきりに余震を感じたから、内山と相談して食後余震の時間を記録することとした。磯に面して、老松が小高き土堤に植つてゐる。其下に一疊敷ばか計りの石の机がある。石の腰懸けが之を繞めぐつてある。暑熱に苦しむとき机に憑れば、清風徐おもむろに來り読書するに最も好し、又明月の波光激灑れんせんたる影を映ずるとき、之を賞するに好適の場所である。其机上で兩人が記録を始めたが、実に頻々である。海を眺むれば漣波さざなみを見るのみで、地震は揺つたかと言ふような風勢である。顧みて背後の山を望めば、其傍より煙霧重畳に見る噴火に彷彿としてゐる。凶を案じて方位を確むれば浅間の方面にあたるらしいが、其にしても稍や近い。然しかし其勢の猛然として天に冲ちゅうし、東方に翳たなびいて居る有様は、火事とは思えない。此の如き濛々もうもうたる白雲の重畳したのを望むは生来初めてのことである。疑惑に沈んで居ること暫時であつたが、午後二時頃更に一條の黒煙が余り遠からざる方面に上るを見た。方位は北に當つて、前に怪

んだ妙義山や、庚申山に似た雲と同じである。凶上にては正しく横浜か横須賀と認められた。そこで余震の観測を内山に託して、程隔りたる往来に出て見れば、罹災者が枕を並べて寝ている。足を怪我した人もある。腰を打ちたるものもある。或は小児が圧死したとて涕を流して居る母親もある。幸に自転車で三崎に向う人を止めて様子を聞いた。浦賀は大滲害、今盛に燃えつつあり、横須賀の市街は滅茶滅茶、石油タンクに火が入ったとの事を聞きましたと告ぐ。帰つて松下に坐し、再び黒烟を望めば確に油の煙である。火事の煙は別に其側に見え、又浦賀の方面にも煙を認めた。黒煙は益々熾に遂に天の一方を蔽い、夕陽西に傾く頃には、東北方面は晦冥今にも雷雨の襲来するかを疑わしめた。其上に白雲は山岳重疊の如く天に蟠踞していた。夜に入れば微光を放つて物凄く、身に粟を生ずる想を起さしめた。

日は暮れる。電燈は点かず、提灯の光で万事を弁ぜねばならぬ。文明の光を失うたる悲さも亦一入である。家は傾き余震は絶ゆる間なく感ずる。危きに近づかんよりは寧ろ露宿するに若くは無しと覚悟をきめ、庭前の藤棚の下に藁を敷き蚊帳を張りて睡る。然し余震に眼を覚されて夢も結ばれず、前後二回横須賀なる石油タンクは爆破し、響と共に地に振い、何となく恐怖の念に襲われたる折柄、閉じたる眼を開き天を窺えば、藤蔓の隙間から半弦の月光漏れ入りて、黒煙の一端は驟雨を誘う雲の如く、牽牛織女の列星は既に西に傾き、晨鶏の一番声を発する頃、宅を纏われる繞れる松林に鴟梟の鳴くを聞きしときは、愴凄真に鬼氣人に迫るの感あらしめた。

斯る経験は都も鄙も同様であつたらう。予の為に特に悲惨の想を貽した一事がある。茅屋の留守番某は、勤勉で正直もので近所のものに可愛がられていた。魚釣りが道楽で、暇さえあれば小舟を漕いで釣りに出懸ける。例年夏期鱈が釣れる。今年は何故か鱈が捕れる。其大きさは東京市中で稀に見るところで、二尺余りもあつた。此の如き獲物があるのは地震の兆であつて、何処にか海底に変化があつたから魚族の集る模様が変わつて来たのであろうと言う話もある。兎も角も今年の大鱈の澆刺たるを刺身にした其味は何とも言われない。八月末には、連夜此御馳走で

鼓腹していた。某は喰うよりは寧ろ釣る方に興味があつた。薄暮帰つて今日は二十尾杯と大得意であつた。鯖を釣るには少しく沖に出ねばならぬ。帆を用うれば往復簡単である。生憎帆が狭くて意の如く風を孕まない。少しく拡張の必要を認めた。九月一日朝来の風雨を冒して帆を広くする為め三崎に行こうとした。女房はこんな日に行かずともいいじゃないかと止めたが、天氣が好ければ釣に行き度いからと強いて出懸けた。村の人も此雨風におよしなさいと言つたにも関らず、何此位の雨風と独言ちつつ帆を背負つて、二里半許の道を辿つて三崎に行つた。第一の店では職人が留守であつたので目的を達せず、第二の店に行つて漸く帆を拡げることができた。将に立去らんとする刹那、地揺れで屋根瓦が落ちた。思い切つて出ればよいのに、少しく狼狽したか再び家に入ると間もなく倒壊し、梁の下敷となつた。遂に人手に救い出されたが、肋骨を打つて骨折れ肺を圧した。此事ありとは全く知らざる下浦では、午後二時になれば必ず帰るべきを予期していたが、三時になり四時になりても帰らず、女房は止めたのに行つて震死しなければよいかと心配顔である。慰むる辞なく、今暫くと六時迄待ちても音沙汰無し、然らば何か變があつたらうと、村の者三四名を頼んで三崎に探見にやる。遂に小学校内に他の負傷者と收容されたのを見出して、夜半に村人は歸つて、只腰を打つた計りと報告する。翌朝担架に載せて村人が連れ歸る。医師の診断は上記の如くであつて、大に驚いたが詮方無い。当人は死ぬ程の傷とは思わない。彼れ是れする内三日を経て遂に死亡した。後で聞けば、第一の店は無事であつたそうだが、よくもよくも稀なるプロバビリチーに適該した悲劇を生んだと、其不運を歎ずるの他はなかつた。翌日葬式をするに僧を迎えにやると、寺は本堂も庫裏も丸潰れ、袈裟が無いから来られないと断つた。致方無く、僧無しで野辺の送りをして、北向きに倒れたる数多の墓石の間に蟠る老松の下に屍を埋めた。折しも瑩前の早稻の穂波の風颯々と読経の声と相和し、松に群る蟬の鳴く音も亦哀を添えて涙の墮つるを覚えなかつた。

二日朝まだ日も昇らぬ内に起き出でて往来に出で、村人に就て東京の様子を尋ねても一向に解らぬ。只誇張した

噂拡まりて信ずべからざる事のみである。横須賀のタンクの煙は昨日より劇しく、天の半分を蔽い、遠き白雲を遮っている。折節灰が飛んで来る。恐らく紙屑であつたらう。此煙を隔てて昇る旭の光は何となく燻つて色を失つた。沖は風ぎて磯打つ波も静であるが、心配になるは東京の状況である。如何なる手段を用いれば之を知り得んと画策しても何たる旨き方便を得ない。内山を煩して横須賀に行き事情を探らしむるより他に施すべき術無く、正午過ぎ横須賀停車場に行き、交通の模様を聞かした。火事場の余燼未だ滅せざる熱灰を踏みて、鎮守府近く至れば、停車場より浦賀に行く途中の高い崖は崩壊して、倉庫は大概潰れていた。水が浦の波止場より横に折れて停車場に至り、駅長に就て東京の状況を尋ねた。何たる要領を得ない。隧道が崩れて列車が埋つたとか、崖下に三百名の女学生の一隊が生理になつたとか、東京へは二ヶ月汽車不通の見込位の話である。幸に海軍軍人に逢うて聞けば、飛行機偵察の結果、東京で死者十五万人との推量である。此の塩梅では東京へ行くには徒歩によるより他方便なしとの事であつた。畢竟取止めのなきこと計りで、持久策に出る外はないように思われた。然し内山が横須賀に出懸けているうちに村の医師から情報を得た。本郷弥生町に住居している人が来て、一日東京を去るとき、大学の医化学教室から出火し、図書館、法文学部に燃え払るを見て来たとのこと、是は大学附近に於ける実見談であるから疑を容るる余地はない。然らば理学部も恐らく焼けたらうと思つた。三日になつて鎌倉辺の消息がちらちら耳に入つた。又横須賀から海軍の用を帯びて駆逐艦が東京に行くことが判つたから、是に便乗するが最上の策と考えた。斯く帰京の為に頭を悩まして矢先に、四日朝三崎通いの汽船が飄然汽笛を鳴らして下浦に立寄つた。今晚東京に帰るならば好便なりと思ひ問ひ合せたところ、以ての外の話である。霊岸島の事務所は一日に焼払われ、事務員が辛くも僅の荷物を持って逃げたが避難する所がない。それで汽船に乗つて下浦に來た。石炭欠乏して三崎に着くことが出来るや否やの問題に当惑している。今明日に東京に帰るような呑気な場合で無いと、頗る興奮して話すので駄目と定つた。帰心矢の如きものが判明せぬ間は発することが不可能である。

流言蜚語は災害に付き物で、之を防圧する手段は考え及ばない。大震の翌日村民を騒がせた一件がある。火元は何処であるか知らぬが、津波が来ると云う飛報である。老若男女荷物を負うて山の方に逃げるものが多い。一犬虚を吠えて万犬伝うとは古諺であるが、斯様な場合の噂は影響するところ少くないから、誠に厄介である。丁度正午前に可なりの余震が来たのでなお人心を噪がした。予は斯る余震は段々薄らいで来るも、半年位は折々驚かされることがある。津浪は大震後一時位ならば来るかも知れぬが、翌日となりては断じてないと言ったけれども、父老は容易に承知せぬ。浜の常時に変り干上りたる様子を指して、旦那、此にあつた水は何処に行つたんべいか、其内津浪になつて屹度戻つて来ますよと頑張る。否、地面が隆起したのだと説明しても首肯く者がない。皆三十六計遁ぐるに如かずと、山を指して逃げる。予の家は最も海に近いが、一向そんなことを為さなかつたから、奇異の想を村人に浮べたらしい。此日残暑烈しく、前日の騒ぎに体は汗沁みて心地甚だ悪し。海は鏡の如く、何の変りもないから、衣を脱いで平常通り水泳を試み、神氣恢復した、然るに従来背丈の立たぬ処が膝位迄になり、浜辺の傾斜が緩く、著しく遠浅になつたことを感じた。又一キロメートルを距る三ツ磯の岩石は、満潮のとき有無を知り難い程海水に蔽われていたが、昨日来平均三尺許り水面に突起して、蝦蟇の坐るが如き姿勢を示している。是等は隆起した確証であると思ひ、此実証を挙げて説いて見たが、漁夫には合点が行つたような行かぬような、曖昧の態度である。其一人は俺の家は川の側だから、津浪が来ると川を遡りますから、逃げますべいと、中々穿つた言葉を放つたものもある。二日三日は大概留守にして逃げたが、四日頃から帰り始めた。五日には皆歸つて来た。それ迄の間に隆起したことを十分理解することができたらしい。恰も其頃大震と殆ど同時に起つた津浪に洗われた、梁や箆の壊れや御幣箱が、伊豆辺りから流れて下浦に漂着した。今日遺憾とするのは、土地の隆起する状況を見なかつたことである。地震の当座軽微な上下動を感じたのみであつたが、よくもよくも三尺許り数分の間に持ち上つたものである。茲に今一つ面白きことは、七十許りの老人の話である。小兒時代には震後に見る通り、下浦の浜は広がつたが、次

第次第に狭くなって、元あつた麦畑も遂に海水に浸入されるようになり、消え失せたのである。浪が浜の砂を凌いで行つたと思つていたが、今は隆起したのを見れば、矢張り沈下したのであつた。六十年を経て旧態に復するとは奇怪な地面の行動であると申した。予が十四五年來の経験に依るも、浜の次第次第に狭くなつたのは、幅員こそ小なれ、事實である。然らば地震を喚起する素因は既に備つていたのである。聞くところによれば、三崎と城ヶ島との間は更に著しく隆起して、舟を用うるところは小部分に過ぎないそうであるが、三浦半島から小田原辺迄を、数尺程数分の間に持上げる自然の潜勢力の大なるには吃驚せざるを得ない。

## 下

流言蜚語は天災地変に伴う煙霧であつて、恰も影の形に付き纏うが如く、古今一轍免るべからざることと思う。東洋では陰陽師が政治の良否を判断する材料となり、適々国の興亡の予言まで為す好資料を供給し、歴史上恐るべき妄言を敢てしたる証跡を索むるに数多の類例を見出し得るのである。二十世紀の今日、自然現象の因て来る理由が大分判明した暁には、最早陰陽師の云為する材料とはならざるも、亦多少の波瀾を社会におよぼすこと無きにもあらず。前に記した波浪と共に、予が居住していた此下浦に、二日夕方から三日四日に予期しなかつた騒ぎが始まつた。それは帝都附近で何処にも共通なる鮮人騒ぎである。流言の出所は誰とも分らぬ。鮮人が横浜地方から湘南に向い、行く行く井戸に毒を投じ、邦人を困めるとの飛報が来た。毒薬は亜砒酸昇汞の類であつて、危険な薬だから各自注意せよとのことである。予もこれは堪らない。茅屋の傍の井戸は海浜にあつても頗る清冽、近所五六軒の飲料水となつてゐる。我家の迷惑になるのみならず、亦累を他人に及ぼす虞れがあるからと思ひ甕焼きの井筒に嵌まつてゐる亜鉛板の蓋を、確と針金で縛り付けた。鮮人はよもや往来から隔りたる家の井戸を索して、毒を投ずるようなことはあるまいと安心して、二日の晩は睡つた。翌朝起きて見れば、ポンプの口は丸る開きで、此処に薬



を投下せられたならば、井水は如何であつたらうと苦笑した。狼狽したときには誰も彼れも辻褄の合わぬことを語ったり、仕出かしたりするものである。序ついでに井水のことを記して置いたのは、大震後間まも無く汲み取つたときには、平常より少く濁つていた。翌日になれば全く復旧した。近傍の井戸で水が涸かれたのもあり、濁つて数日間洗濯用にもならぬものがあつた。要するに井底の土の崩壊したか否かの事情を示す丈に止つて、余り深い意味はないようである。

三日の朝になれば村の若い衆は、火事装束で鳶とびくち口を持ち、いかめしく道路を固めた。道に材木青竹数本を横たえ、鮮人ござんなれと云う風勢を示していた。幾人捕われたか不明である。爰こゝに四日の正午頃、長男治男は鎌倉から自転車で訪ねて来た。途中ひどい目に逢つたと言いなから、鮮人騒ぎの余波を蒙つた話をする。折も折、会社員であれば、不断はハイカラ服であるところに、十年前着古した一高の小倉服を着て、芸術家風の長髪と来ているから、若い衆は髪の毛の長いのは鮮人と極め込んでいる矢先に頭われた怪漢、これこそ捕物と、途を遮つて自転車を止める。此の場合手向いすれば反かえつて身の害と、飛び降りたはよいが、少々の弁解では容易に承知せぬ。幸に鳶とびくち口連の中に見覚えあるものが是は治男さんだと言つたので、終に物笑いになつたそうである。始めから鳶とびくち口を揮ふり廻されては危険であつた。是に懲りて治男は帰り途、斯かる危難を繰返さぬ為に、村役場に行き証明書を貰いに出懸けた。宮田附近またに来ると、復また前同様、証明書を示しても中々に承知せぬ。音楽家か油画家のような髪を眺めて、訝いぶかしく思つている若い衆達に対し、かねて饒舌おしゃべりで、散々爺を困らせた口吻を以つて、長広舌を奮つても何の効能も表れぬ。やがて究問者の一人は、朝鮮人ならこんななべらべら日本語は喋べれないなど言い出したので、一呼吸ついているところに、知己の小学校長が通り懸つて助太刀に出た。此証明書の通りだ。間違い無い。俺が保証すると言つたので、漸よく血路を開いて自転車を駆つたそうである。此の如き辛き目に逢つた人は随分多数あるであろうが、鮮人ならざるものも亦迷惑千万である。

話は戻つて、東京の消息であるが、治男が来たので第一に発した問は、大学其他帝都の事である。彼れは地震當時、日本橋区に在る某会社にいた。まだ火事の騒ぎも一部分に限られた頃、東京を去りて、十五時間を費し鎌倉に着いた。途中川崎なる六郷鉄橋を辛うじて通過すれば、明治製糖会社が大破し、東京電気会社の研究部に煙の上のを目撃した。鶴見迄会社に関係ある人と道連れになり、研究員の多人数圧死したことを聞いたそうである。名前は聞いたが確に覚えていないと申すに依て一々名指して問えば、国賓とも謂わるべき人が死んでいる。同じく東大物理出身であつて、将来多望なる研究者の斃れたるを聞きては、一掬の涙を禁じ得なかつた。大学の状況はまだ判然しない。一部分焼けたことは疑無い。又上野方面が焼けたか焼けぬかも不明である。然し東京人の食料攻めに逢つていることは疑も無く、軍艦が救助米を関西地方から輸送することは事実であるから、其到着する迄は帰らぬがよいと覺つた。下浦には玄米の一千俵位は貯えがある。副食物は、一時肴こそ無けれ、野菜は各自作つている。又予の庭園には四十羽以上の鶏がいる。一日一羽屠つても、一ヶ月は優に持ち耐える。急いで帰る要はないから、救助米の来るを待ちて帰京せんと決定した。斯くして数日間は悠々閑々として、書物を読まんとしても、時々見舞われる余震に興を覺まし、一向に心を込めて考えながら読むような事はできず、無卿に苦んでいた。浜を眺むれば、水族動物に均き餓鬼子供等は、海水浴は試みず、いつもになく砂をあさつて貝を拾つている。彼奴等は海に入り度くも親が許さぬ。まだ津浪の流言に怖れていると感付いた。斯る場合には科学の智識は忽にすべからざるものがある。今の所では余震計りで、それも段々淡らいで行く。海は静で何の異状もない。よしんば津浪が来たとして、太平洋方面から来るのであるから、前兆もあり、其来るのが見えてから駈け上つても、安全地帯に入るまで十分余裕がある。まして残暑は厳しい、泳ぐべしと思ひ立ち、毎日本に浸されていた。漁夫等は之を見て竊に晒つていたようであるが、こちらからは晒う方が可笑しく、双方考えの違ふ点は頗る面白く感じた。

無事に苦んで松下の石机に靠れて海を眺めていると、鱒鱧の煙を吐いて東京方面に入港するものがある。其形で

直に艦名を知ることができたのは長門である。扶桑、金剛らしき軍艦も東京湾を指して来る。是等の諸艦が米を満載して入港した上旬は、帝都の食糧は不足を告げぬから、最早帰京しても餓死する虞は無い。兎も角、駆逐艦便乗を試みるに如かずと、七日払暁内山助手下婢と共に三名下浦を出立した。若しも亦鮮人騒ぎのような事があると困ると思ひ、村役場に行き有無を聞き合せたところ、話は違つて、午前十時に関東丸が東京に向けて出帆する。其れに乗らなければ帰京は六ヶ敷からと云うので、鳥渡出立を躊躇した。然し横須賀に行きて待つも一方便だろうと思ひ、細雨を冒して山路を辿り、目的地に向つた。山越をするのであるから、下浦から望見した房総の諸山の如く、山崩れて道路も塞がっているだろうと思ひの外、栗津附近は、何時地震が揺つたか分らぬ微少の損害で、百姓家でも瓦の落ちたのが殆ど見当らぬ程度であつた。其れに引替へ、横須賀の市に入るに従ひ、実に烈しい損害で、崖崩れの甚しきは予想以上であつた。特に戦慄したのは、煉瓦屋の倒壊で、道路が全く破壊した煉瓦で埋つた一角を過ぎ、鎮守府の偶に出た。時既に十時であつた。関東丸は最早出帆する。駆逐艦便乗の手続きは如何しようと、此処彼処見廻り、水交社の側を通れば、機関学校教授黒須康之介君に不図出逢つた。是ぞ天の恵かと喜んだ。教授は早速手続きして呉れて、予等三人の駆逐艦便乗は許可された。出帆までは三時間余の暇があるから、いつもならば巡覧散歩を試みるのであるが、山路の旅行で疲れ果て、近所を見渡す計りであつた。一日以来、煙りと光りに驚かさされた石油タンクの煙こそ細くなつても、まだ焚えている。倉庫や、埠頭の壊れは聞きしより甚しく、只だ些も変らぬは船艦のみである。二時駆逐艦第五号に搭乗して、海面を見れば、石油の薄層を認めた。折節驟雨襲来、海面に粟を生じた観があつた。三時出港、快速で間も無く本牧沖を通過し、横浜に著いた。山手の崖地に巍然として輪奐の美を競うた富豪の家屋庭園は、皆禿げて痕跡を止めず、波止場近くの建物は焼け尽きて、石炭の余燼まだ滅せず、盛に煤煙を噴いている様は、望遠鏡内に顕れただけでも、横浜の惨害の甚しかりしを想わしめた。艦の碇を下したところは山城艦の偶で、嘗て佐伯灘で一週間程、艦砲射撃を見学する為便乗したことを想ひ起さしめた。其近

くに十時に出帆した関東丸はまだ投錨している。反て後れて好かつたと思つた。やがて駆逐艦も関東丸も出港したが、其速度の差は著しく、暫くの間に関東丸は追抜かれた。駆逐艦の船首に頭わるる艦の中心線は十九度四十分余の角度を為せる、常定波の際立ちて見ゆる有様や、船尾に頭るる旋渦万変する特殊の浪は、実に流体力学の好問題であり、又消滅方法にも頗る研究を要することを思わしめた。然し地震以来予が懸念していたのは、船橋の無線電信柱のことである。斯る高柱が能く地震に耐え得たか否かが問題であつたから、羽田沖に達した頃、望遠鏡で其模様を窺えば、空に聳えて一條の柱を認めた。然らば何の障りも無かつたかと胸を撫で下した。其平衡を保つたのは固有振動期の長き為であろうとは推定したが、後で聞けば江戸川以東震動が激滅したそうであるから、是が主なる原因であつたろう。品川沖に来れば、深川本所の焼跡が見える。丸之内ビルヂング等も明かになつた。数多の煙突は立つていても、毫も烟を吐かず、何となく東京を見る心地はしなかつた。沖に碇泊する諸軍艦は、予が既に下浦で遠望したものや、沢山の駆逐艦であつて、戦争でなく地変に対して努力せねばならぬ軍人は、嘸任務の変つたのに驚いたであろうが、飢餓より東京市民を救つた功績は滅却せられない。丁度六時に芝浦に上陸した。山積せる食料品はまだ配送の手續を為し得ない有様にあつた。上陸してやれ嬉しやと思つたが、上野の宅まで帰るには、徒歩では少くも二時間半から三時間かかる。九時になれば通行を禁止すると云うことを聞いている。今夜は復野宿かなと思えば悲くなつた。然るに同船した仏国大使が間も無く自動車一台を狩出して来た。同じ店に行き今一台出して呉れと頼んで見た。ガソリンが不足で行かれぬと断られ、泣く泣く芝の通りに出で、大西自動車店に掛合つて見た。都合好く一台残つている。ガソリンが上野に往復するに足りないかも知れぬが、出してやろうとの好意で、途中迄でもよろしと乗出して漸く安堵した。薄暮銀座通りから日本橋を経れば、旧態どころでなく、恰も廢墟を彷彿うが如く、ヘッドライトに映ずる焼残りの有様は、想像以上に無情の感を起さしめた。気が揉めたのは上野の山に近づく頃であつた。松坂屋は跡形も無い。公園の入口の群衆は百鬼夜行の凶を見る如く、漸く精養軒と博物館と無

事なるを知つて、吾家も是ならばと思ひ、七時帰宅して見れば、僅かの損害で家族も皆無事であつた。翌日長男が不相変の姿でやつて来た。昨日関東丸で横須賀から東京に航海する途中、五号駆逐艦に追抜かれ、齒痒くて耐らない上に、昨夜上陸は危険であるからとて、停船して今朝漸く芝浦に著いた。若し過ちて時刻に遅れたならば、昨夜入京が可能であつたがと、悔しがつたけれども所謂後の祭り、予が駆逐艦に在りしを知らなかつたのも可笑しき次第である。

東京に入りて後の事は記する必要は無い。前に記した通り、震後一週間内の事情を窺えば、通信機関の全く杜絶したため、吾人は少からず心配もし亦迷惑もした。電信電話郵便は全く不通、汽車汽船に至るまで用を為さぬのであるから、相互の消息も往来も不可能に陥つた。せめて安否を問合する方便でも直に開けたならば、甚しく焦心の事は無かつたらうに、其も頗る曖昧の裏に葬らるることになつて、眼明きが急に盲目になり、聡い耳が俄に聾になつたような感じが誰にもあつたらう。斯る場合に、若し我邦に於て電波放送(Broadcasting)の設備が完備して居たならば、個人としては如何に便宜を得たであらうか。そもそも電波放送の仕組は、近年諸外国で頗る発達して、其最初の目的は遠隔の地のみに限らず、実際出場せずして音楽、演説等を、自宅で恰も其場に臨んだと同様聞くことができるように、電波を利用して、自宅に設けた受信機に受け、坐りながら嚙喰たる音楽を楽み得るようになしたものである。電波を発生することは可なり設備に費用を要するのみならず、亦無暗に諸方に電波を發送せられて、混雑を来すから、是は制裁を設けねばならぬ。一定波長の電波で発信局から送る通信、其他音楽演説等を受くるには、僅に百円位の費用で用足るのみならず、素人でも其装置を利用し得る故、ブロード・カスティングは米国杯にては数万の加入者があつて、ニウ・ヨークから放送するとすれば、サン・フランシスコは愚か、ハワイまでも達し、純素人が、演説なり、音楽なり、通信なり受けることが可能である。それ故、今回の如き地震の詳細は、若し放送設備が帝都の近傍にもできて居たならば、其情報を各自造作も無く知り得たであらう。予の如き貧乏人でも、受信装

置位は東京にも田舎にも必ず設けて置いたろうと思う。そうすれば、流言蜚語に惑わされ、誇張した噂などに耳を籍すようなことはしなかつたであろう。又斯る人の耳目を疑惑せしむるような報道を予め防止する方便も亦開けたであろう。徒に耳目を塞ぎて真相を覗わざる為め、千万人の窮迫を招くようなことはあり得ない。我国に於ける科学の利用は、頓に啓けたように思う人があるけれども、まだまだ欧米の下風に立ちて、追及し得ざる境涯に在る事は、今度の大地震の際、通信機関の甚しく杜絶した点に於ても亦其一斑を窺われる。ブロード・カスチングの設備は、地震火災は無くとも、速に完成して貰いたいものである。

九月一日は本年二百十日前一日であつて、所謂農家の厄日の前日である。又九月一日は仏国民にあつては、セダン落城の日で、国辱之に過るものはない。東京、横浜市民にあつては、恥辱は毫も浸蝕していないが、亦市のセダンに均しき災厄日であつた。翻つて帝都の大部分が灰燼に歸したことを種々の事情に鑑みて見れば、寒心せざるを得ない。地震は何時来るか予知の方法は不明である。若し此大震の日が、朔風凜烈なる冬期にあつたならば如何であつたらうか。飢餓に迫るのみならず、又寒氣と云う大敵が控えている。又当時悪疫が流行していたならば如何であつたらうか。予が家の近傍なる上野公園内に於ける数万の罹災民の状態を目撃した上旬、予は思わず、コレラが蔓延した時に地震が来なかつたことを喜んだ。若しや大震が国家多事の際に襲来したと考へたならば如何であろう、仮りに国を賭して勝負を決していた日露戦争如き最中に、此地震が来たならば、我國民は恐らく意氣は沮喪しまいが、物質上の損耗に至つては、全く飛行機で焼夷弾の攻撃を受けたと同一である。折角勝誇りたる曉に、武器製造所の一部を焼かれ、堆積せる物資が煙と灰に化したとしたならば、如何に名将ありとても術の施すべきものを見出さぬであろう。況んや此変災を機として、敵に乗ぜらるるの虞は万々あることを覚悟せねばならぬ。実に東京の如き、往古より地震の襲来を蒙り、将来に於ても亦不意打ちを喰う虞あるところでは、咄嗟の場合機宜に処する方策を講じて置かねばならぬ。是等の事情は常識に訴えて、誰も万承知している。しかし五年十年を過ぐれば、喉元通

れば熱さを忘るの譬に洩れず、自ら忽になることは喋々する必要がない。まして此大震に遭遇した若い人が老人になり、時代が変る頃迄地震が襲来せぬときは、一朝今回の如き災厄に逢えば、動もすれば復覆轍を踏むようなことに至りはしまいか。取越し苦勞かは知らぬが、憂慮に堪えぬ次第である。日本国中地震に悩まぬ処は無いと世人は信じて、東京以外に帝都を遷すべき好適地は無いと思つてゐるようである。この点に就いては頗る議論の余地がある。予の見るところでは、東京程数々大震に冒され、損害を受け易き地方は本邦にて稀なるようである。是は地盤の関係もあろうが、大地震帯に接近し、而も地震帯に圍繞せられている。且つ下町の如き沮洳の地を埋め立てて家を築造したところでは、被害は多大であることは申すまでも無い。然し地震を怖れて他を顧みず、都市を計画する如きは、野暮の極である。港湾舟車の便、物資集散の利、其他沢山の條項を考えに入れねばならぬ。是等は或るものに対しては宜しく、或る他のものに対して悪しきときは、双方の権衡を吟味するが当然の処置である。今度復興計劃によりて、地震火災の厄払いを大部分為し得るならば、依然踏み止るは策の得たるものであろうが、一概に首肯することはできない。

今度の地震は振動頗る緩慢で、専ら地不動であつたことは、普通吾人が屢々感じている弱震に対して比較して見ると解ることである。大地震はいつもこんなものであるか、頗る疑わしい。恐らく振動の急激なる、且つ上下動の大なるものがあるではあるまいか。相模灘の水深測量では、三百尺以上陥落し、七百尺も隆起した処があるようである。是が一時に変化したか、徐々に斯くなつたかは問題として、仮りに一時に起つた地変であるとすれば、如何なる堅牢なる建築でも、斯る變動に抵抗し得ない。若しや斯様なことが、東京を中心として起つたとすれば、全市覆滅の歴史を残すのである。例え其十分一であつても、逆も築造物で抵抗し得るものはあるまい。今度は洋中に起つた大變動であつて、東京は単に其余波に感じてすら目前の惨況を呈した。地震に依て陥没或は隆起するのはいつも海洋中に於てするのでない。陸上にも数多ある事である。今回の如き斯る程度のものには未曾有と謂わざるを得ない。

未曾有であるから今後ないと言われない。其何十分の一でも恐ろしい結果を生じ得る。其故今度東京が復興するとすれば、予が切に期待する調査は、東京湾の地質学上の検査である。何やら此湾の生じた由来が、相模灘と同一歴史を有するにはあらざるかと疑われる。或る時期に於て陸地が陥没したものであるまいか。それとも房総半島が隆起したものであろうか。予は懷疑に堪えない。若し此湾が斯る形跡のないものであるとすれば大に賀すべしである。けれども之に反して、更に一時数十尺数百尺も陥没或は隆起するような証左を、其地形と地質構造上有するものとすれば、頗る警戒を加えて都市を計画せねばならぬ。此の如き疑問に対しては、地質学者は、容易に解答を与えぬかも知れぬ。動もすれば、そんな事は無きにしてもあらず。然し其が百年後に起るか、百万年後であるか、判然とは言い難い位のことではあるまいか。若し全く無しとの議論を得れば、敢て心配するに及ばないけれども、安政二年の地震の震源地が松戸附近にあり、川崎を中心としたものも歴史上に顕われていることを思えば、無しとするよりもありとする方が近からんと思うのである。只今東京湾を怪んで書いたが、東京及其附近の土地でも、同様の虞あらば、是れ又帝都にとつては容易ならぬことである。

竊に聞くところによれば、本郷で観測した結果、今回の大震の加速度は重力のそれに比して約十一分の一である。此値は地盤地形等の関係より、同じ東京に在ても、本所深川如き土地では其三倍位に上ったかと思われる。若し湘南地方で測つたならば、更に大きいかも知れぬ。相模湾の大陥落や隆起を受けたところでは、一層大なる値を得たことは、疑う余地が無い。さすれば東京に於ける地震の強さは、左程迄のものでないことは易しく考えられる。之に対して家屋の損害は、皆承知の如くである。幸に震死した人は割合に少かつたが、地震の喚起した火災の無残なる事は有史以来類例を見ない。帝都の災害は専ら火事より生じたものであると謂わねばならぬ。其誘因となつた地震が、震源附近に於る如く甚しからずして、此惨事を生じたのに鑑みれば、若し東京が震源地でもあり、地震が今回の如く猛烈なるものであつたならば、帝都は殆ど倒壊せざる家無く、灰燼に帰せざる建築なき惨事に罹つたで



あろう。其故今度の東京に於る地震を以て、大地震の基準として復興計画を立案すれば、将来に笑を貽す種となりはしまいか。殊に地震の性質が、至て緩慢であつたことから推論しても、急激にして振幅大なる上下動を伴う大地震が、東京附近から起つたとすれば、其の結果は今回の震災に無事に経過した建物でも、運動の性質が変更したため、災害を免るることは可能であるか、予は答弁に苦むのである。其故万全の策としては、周到なる検査を為したる上、斯る災害の襲来せざる土地を選定することが今日の急務であると考え。東京程地震の研究に便利な土地はないと誰も評している。研究に最も不便であつて、而も大都市の枢要なる交通経済條件を満足する土地は他に存在しないであろうか。本土は蕞爾たる東洋の島国には相違無いけれども、大東京は知れた面積を有するのみであるから、三四十年を費して適當なる場所を詮索したならば、恐く幾多の候補地を選出し得るではなからうか。日本国中地震の揺らぬ処はないから、東京に居据りが最上の策であると、調査もせずして論断するは如何にも早計だと評せらる。其故目下の計劃たる復興は決行しても、街路や建築物は修繕改築を要するから、数十年間綿密なる諸方面の調査を施したる後、東京が最上となれば此れ程結構なことはないけれども、若し他に良好の場所があるならば、東京に大地震の再来するを待たず、徐々に移転策を講ずる方が策の最も得たるものではあるまいか。五六十一年間蓄積した財貨を、一朝にして破碎し且つ焼尽するより、遙に勝れることは、智者を待たずして明なるところである。

斯様な調査を為すには、当然沢山の要素を考えに入れねばならぬ。しかし是等の要素に対する條件を総て満足せしめ得ることは、到底得べからざることであるから、地震以外の條件は略及第した候補地を得たりとすれば、其地震に対して如何であらうかとの問題は、多少解決する科学的の方便があると思う。在来本邦で開拓された地震学は、統計的の調査が多くて、歴史は繰り返すという諺に従い、多少の因縁は地方に依て存在するようであるが、其未來に襲来するものに就て、時期杯を予定することは殆ど不可能である。従て雑駁な議論より外はできない。其故是計りに信頼することは科学的価値の少きものである。地震の起るのは震源地の表面で起るのではない。地下数十料の処

に實際は地殻の病源が存している。其狀況が皮膚病的腫物的はれものに表面に顕るものと解釈せねばならぬ。地震計に示さるる振動は、人間に譬うれば内臓の動揺が表面に伝つたものと見て大差無い。其故医者が打診を行うが如く、地殻を叩いて其狀況を覗うことが可能かと云うに、実行的には殆ど不可能である。地下数十軒キロ迄届く打診を為すには、莫大なる力を加えなければならぬ。畢竟人工的には到底行われぬ事である。地殻の頗る深い処まで力を及ぼし得る天然の作用を籍からねばならぬ。即ち其一例は、日月の引力に因る作用である。潮汐は日月の引力に基くことは、小学児童でも知つてゐる。其引力は単に海水のみに及ぼさるるものでない。地殻も亦同作用を受けてゐる。水には剛性がないから、潮の干満で其作用の変化を観測することができる。そして其作用は著しいものであることは誰も熟知してゐる。之に反して地殻は鉄鋼以上の剛性を有してゐる。其故潮に干満あるが如き大なる変動は示さないけれども、地殻も亦微細なる運動を為してゐる。所謂地殻潮汐なるものである。海水の潮汐と同様に、此運動は弦運動に分解し得る。此観測から地球の剛性を推定することができた。即ち今言つた通り、鋼鉄よりは剛い弾性を帯びてゐる。若し此剛性がより弱かつたならば、地殻は今日より頻繁に大地震に見舞われるであろう。地震を發する地殻の病根を宿してゐるところは、表面に斷層とか水陸の不均とか、種々の疵を示してゐることは当然であるが、内部の様子はさつぱり分らぬ。地質上に顕れた変動は過去の出来事を表現してゐるに過ぎない。吾人の知り度いのは現在と未來に於ける病根の發展か萎縮の景況である。其故若し地殻に何か病根があるようならば、其強弱試験を行い、局処的に特異なことが有りはしないかを調べねばならぬ。そして試験に用いる力の加え方は、必定病根の処まで達せねばならぬから、日月の引力に信賴するが捷徑しよつぱいである事は、科学者でなくとも明瞭に覺り得る。換言すれば、地殻潮汐を候補地附近で施行するが適切なる方法である。予が予期してゐることは、斯様な弱点を包蔵してゐる処では、潮汐の大きが増し、又その地方に固有なる特殊運動も加わつて来るから、無病の地殻に於ける如き、單純なる潮汐を示さず、稍複雑なる運動を示すのであろう。試験は余り容易でないけれども、観測に堪能なる技師があれば

可能である。若し又之に付け加えて、夏冬気圧の平均値が異なるにより、如何なる影響があるか、又海水の干満に依る地殻の重荷量の变りが如何なる変化を調査する地方に及ぼすかを吟味することができたならば、是も亦診断に対して、有力なる材料を供給し得る。京大の志田博士は嘗て斯様な測定に従事されたが、諸所に於て行われざりしは遺憾である。斯る調査を考案して見れば、種々な方法が案出されるであろうが、予の考に浮んだものを一つ記したに過ぎない。

精密なる水準測量を為すのも一の方便と考えらる。現に今回の地震の起る数十年前から、或る方面の陸地が沈下しつつあったことは明瞭である。然しかくの如き変化は細心なる注意を払い、年々精測する必要があるから、歳月を消費し、稍々まどろこしく感ぜられる。測地学上から申せば、太平洋の平均水面に対する調査を實行する。地震の方から申せば寧ろ相対的の問題である。或る処に基点を設けて、それに対する各所の隆起若くは沈下しつつある状況を調べることになる。其調べる箇所は沿道の地点に於てするより、地質上に関係して歩を進めねばならぬ。即ち断層の両側の如き処や、地質構造の違いを示す所抔は、特に吟味を要するから、三角測量に附随して施行されていゝる水準測量と、幾分か趣きを異にせねばならぬ。此の如き測量を為すには特別な精密器械を案出し、従前より微細なる調べを為さねばなるまい。而して其結果は恐らく地方に特異なるものを生じ、其変動を来したる理由に就ては、細心なる考慮を要する。単に水準が變つたから地震の前兆であると即断することは早計に過ぐる嫌がある。従て其咀嚼方法に就ては、学者間に異論を生ずることは免れ難いから、頗る誤差の大なる調査ではあるまいか。更に之に類した観測は、経緯度の地方的変化の有無であるけれども、逆も水準測量の如き地殻の変動を明瞭にする程度には行われまいと思う。重力磁力等の事も同様である。尤も重力は地下の物質配置を幾分か知り得る方便であれば、多少地殻變動に關係する研究材料を得るに近い。磁気も之に類しているけれども、變動が地下に在るか、大氣の上層より来るかを容易に判別し難い。従て其原因を追求するに違ふことが屢々あるのであらう。其故余り信頼し難い

研究に属する。又曰下部博士の主張する、地震伝播速度の差異を各地方に於て測定する方便もある。今日無線電信の發達したる時代に於ては、此測定は至て容易に実行し得べきことは誰にも分明である。只精密なる自動記録装置と確實なる時計とがあれば、無線の装置は大なる費用を要せぬけれども、此案は恐らく速度の地質構造に依り多少の違いあることを闡明するに止まり、予知を為すまでには至るまいと思われる。大地震にあらずして、屢々起る小地震に対しても実行し得るから、試験を為す価値はある。殊に遠方地震と近距離の地震との速度とを比較対照して見たならば、地震学上地殻の弾性に関する有益なる結果に到達することは疑も無い。而して震波が観測所に到達するまで、大部分弾性の変つた地殻を通過するならば必ず発明するところがある。概して斯く変性した部分は小区域に限られて、多くの場合に其伝播速度に及ぼす影響は観測上明瞭に突止むることが困難であろう。若し人為的に恒定した二地点の間に、一定の方向に震波が進行するような試験が可能であれば、此案は頗る妙であるけれども、地震の起る地点は必ずしも一定して居ないのみか、震源は大概異つて居るから、予測の根拠を此観測から得らるるまでには、多年の研究を積んでも如何わしく思う。然し此の如き地殻内弾性に関する調査は、一日も早く実行して、表面計りの岩石の性質に限らず、地下に伏在する物質の弾性を詳にして置かねば、地震の研究を進むるに確固たる論拠を得ないから、是非実行しなければならぬ。何故今日迄此案が等閑に観過せられたか、識者は疑を挟むのであるが、予は其理由を記するを欲しない。地震学に志す人は自ら覚ることがあろう。地震研究方針は此際一転機を促している。

ウエゲナーが主張する議論に従えば、大陸は最初一塊りであつたものが、過去時代に分裂して今日の状態に至つた。例えばアフリカと南アメリカが分離したことは、其図を嵌め合せて見れば判然する。其他の大陸に於ても同様であり、大陸は浮島に似て、始終移動しつつあつて、其速度こそ微々たるものであるけれども、千万年か数億年の後には、甚しき変りを生ずる訳である。日本の諸島はアジア大陸に引張られて、共に移動しているものとすれ

ば、当然其牽き摺られる際に滑に行われることは考え悪い。外洋との関係、大陸との連絡等には、必ずしも行動を諸方に一致せしめて、毫釐乱れず行われているとは思われぬ。畢竟多少の無理が生ずる訳であれば、動もすると之に伴う地殻の変動が表面に顕われるであろう。地震も亦之に従って起るであろう、地震帯が日本島の外側を繞っているのは、或は此の如き従来余り考えられなかつた運動に帰因するものではあるまいか。ウエゲナーの所説は発表せられてから日尚浅く、之を支持する証拠は地形のみならず、生物の分布等の研究で略論定せられているようであるけれども、是等は或る他の仮説により説明せらるるかも知れぬ。兎も角、世界の数多の地点に於て、無線電信を以て経度を従来より一層精密に測定する方便が既に緒に就いた。毎日其測定に資する時間の報告が仏国のボルドーから発せらるる。数十年間不斷観測を為して、互に其測定を比較攻究すれば、大陸が相互間に離れつつあるか、或は大陸が更に分離しつつあるかの問題は解決せらるるであろう。斯く解決せられた暁、果してウエゲナーの説く如き行動を大陸が為しつつあることを明にしたならば、アジアの東陲に位する日本島の地震多き理由も、一部分は之に帰着せしむるに至るのであろう。是は蛇足であるが附記して置く。

読者は此の如き有耶無耶の諸説を列記すると、くだらぬ長談義であると哂われるであろうが、地下数千尺に入れば、吾人の知識は誠に空漠であつて、多くは臆説に過ぎない。地表で為した実験を土台として、何千何万気圧の下に在る物資の状況を臆断するのであるから、科学者の所説は丸で夢だと批難する人もあろう。しかし当るも八卦、当らぬも八卦と云うような論拠の少ないもの計りでもない。自然の原則は人間の想像で組立てたものではない。実験より推理研究した結果であつて、決して一種のドグマでないから、甚しく正鵠を外れたものではなからう。吾人がまだ搜りを入れ得ない、地殻の内部の打診を行つて呉れるのは地震である。其故医者が肺臓の病める状況を、打診により臆測すると同様なことが、地震によりて行われていると見ても大差はあるまい。しかし診断の当れるか当らざるかは、病理解剖で判然するが、地震の場合にはそれが行われぬのは残念である。又怪しげなる処を叩いて、病氣

の伏在するところを判定することも今日では不可能に考えられている。是が都市計劃<sup>なご</sup>杯に、大地震の襲来しないところを選定したくもできない相談であつて、一頓挫を来す訳である。予が最初に記した地殻潮汐の測定は、地殻の脈搏を吟味することに相当して、幾何<sup>いくばく</sup>か未決の問題に接触し得るものと信ずる。しかし余り長くなるから科学的話は是で打切りにする。

東京は古来地震に逢つたこと度々である。今回に類する大損害を蒙つたのは、明応七年、慶長九年、元禄十六年、安政二年に起つた。四百余年間に變災に逢うこと既に五回、今後幾年かを経て復災<sup>また</sup>に罹るであろうことは、恐らく確かであろう。それにも関らず、其都度、旧趾に都を復興した。今後復興した都が復地震<sup>また</sup>に襲われて目前に在る如き惨況を呈しなければよいが、其保証は誰も為し兼ねるであろう。建築は堅牢になる。火災に対する設備は完備する。最早地震が揺つても大丈夫と安閑と構えていられるであろうか。地震が今回のものであるならば、五十年、百年後には諸方面に發達を来すから、恐らく僅かの損害で済むであろう。しかし其点の保証が付け難い。鉄筋コンクリートが地震に対する最上の建築法であると決論せられないけれども、それは地震が今回の如く緩慢なる水平動である場合に試験せられたに過ぎない。地下鉄道が敷設せられて能く急激な上下動に堪え得るかも亦問題である。今度の地震を基準として復興し、永遠の計を遂行したと思つたならば間違ひであろう。其故予は東京が是非踏み止らねばならぬ土地であるかを攻究して貰<sup>た</sup>い度い。一世紀位を期して復興するは妨<sup>さまたげ</sup>無<sup>い</sup>けれども、帝都は永久に此処に定めねばならぬものであろうか、疑惑の念<sup>も</sup>禁<sup>じ</sup>難いのである。若し外国人が過去の経過を熟知し、此始末を見たる後、東京が不幸にして再び震災を蒙つたとて、今回の如き同情を寄するであらうか。如何にストイクな国民であると今日賞讃しても、後には何と批評を下すか、予は之に答うるに苦しむのである。

予は帰京した翌日、上野公園見晴し台と西郷銅像の辺から東京市を展望した。見慣れた景色が一朝にして斯<sup>か</sup>くも荒寥たる廢墟の如く変化したかと大息した。昔から江戸の花と言われた火災<sup>か</sup>が斯<sup>か</sup>くまで暴威を逞<sup>し</sup>うするかと、覺

えず武蔵野に咲きも咲きたり江戸の花の歎を想起した。黍離しよりばくしゆう麦秀の歎どこでは無い。ナポレオンの大軍を敗はいじく衄せしめたモスコウの焼け跡も、斯くまで惨凄なる景色を生じたとは想像されなんだ。台下に聳えていた凌雲閣は頭を挽もぎ取られ、本願寺の高利も一円の煙に化した。遙に見ゆる深川本所の煙突は、平時煤煙を忌憚なく吐いて、帝都の空に濛氣を翻していたが、其下に建てたる家屋は跡形もなく、林の如き黒筒も窒息して止まる鳥さえ無き有様である。嘗て散歩の序に、此台より眺めて、本所深川は現時こそ製造町になったけれども、将来は碁盤型に溝渠を堀り、橋を廢し小舟を用いて交通したならば、東洋のヴェニスを形成するを得ん。龍頭りゆうとう鷄首けいしゅでなくとも、瓢箪ひょうたんと三味線の舟首を付したゴンドラを浮べたならば、月に棹し花に酔う佳客は、管絃の響に興を起して、粹いきを極むるものあらんと、妙な空想を描いたことがあった。目前に惨害の景況を望めば、いつかヴェニスの夢も幻の如く消え失せた。見慣れた煙けむりは見えねども、見慣れぬ煙けむりは隅田川の左岸に見ゆる。是ぞ被服廠跡で旋風と火簾の災に罹つて、堆うずたかく豊ねた屍を荼毘だびに付しつつかある過程であつた。遂ついに伏屍三万、白骨積んで丘を為す無残の歴史を伝えしめた。斯かくて感慨無量、想い回さしめたのは一日の午後下浦から觀望した遠方の煙けむりである。彼の万渦ばんかきようゆう洶湧せる雲の中には、建築物は勿論、衣服、財貨、珍宝、器什、あらゆる物質の煙が籠っていた。衆人に対しては一文の価値無き一家伝来の宝物も、酸化作用で其中に捲き込まれた。画工が丹青を凝らして成就した軸物も、世に二つと無き古書珍本も運命を同じうしたことを考え、而も此煙は数万の生靈の膏血を蒸発した煙と共に雲と為り、遂ついに三日には雨露となつて田畑を濡うるおし、焼跡に降り、吾家の剥がれたる瓦の隙間を縫うて天井てんしやうに入り、夜中点滴の絶えなかつたことを思うて、悵然ちやうぜん動悸を催した。帰途東照宮や五重の塔の銅の瓦を熟視すれば、実に「アズライト」の本色を現わしている。是も火災の賜ものであると覺つた。其夜余震に夢を覺されて、転うたた嗟嘆さたんに堪えず、噫あゝ、地震一蹴、可憐焦土、後の人は此悲惨なる歴史を讀みて、必ず當時を追想し、哀みを発するであらう。後の人は之に鑑みざれば復また後の人をして哀ましめん。自然は無情である。無謀なるは人間であるとの感は、深く予の脳裏に刻まれた。

(大正十二年(一九三三)十一月・大正十三年(一九二四)一月『思想』所載)



- 長岡半太郎著『随筆』（改造社、一九三六年十一月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。